

日本商法教程

王 萍 编著

商法



上海外语教育出版社

日 本 商 法 教 程

王 萍 编著

上海外语教育出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日本商法教程 / 王萍编著. — 上海: 上海外语教育出版社,
1997 (2002重印)

ISBN 7-81046-284-9

I. 日… II. 王… III. 国际贸易—自学参考资料—日本 IV. H36

中国版本图书馆CIP数据核字 (2001) 第068412号

出版发行: 上海外语教育出版社

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机), 65422031 (发行部)

电子邮箱: bookinfo@slep.com.cn

网 址: <http://www.slep.com.cn> <http://www.slep.com>

责任编辑: 赵丽君

印 刷: 同济大学印刷厂
经 销: 新华书店上海发行所
开 本: 850×1168 1/32 印张 12.5 插页 4 字数 276 千字
版 次: 1997 年 11 月第 1 版 2002 年 10 月第 3 次印刷
印 数: 5 000 册

书 号: ISBN 7-81046-284-9 / H · 491

定 价: 16.00 元

本版图书如有印装质量问题, 可向本社调换

编者说明

《日本商法教程》是日语国际贸易专业的必修课程。日本商法实质上是日本的企业法,该法自1899年问世以来,经过十多次修改,现已成为一部比较完善的法典。日本商法建立和健全了日本现代企业制度,规范了各类公司,尤其是股份有限公司的组织和行为,保护了公司、股东和债权人的合法权益,维护了市场经济的良性运转。因此商法在日本法律中占有非常重要的地位。

我国正在进行经济体制改革,公司是市场的主体,没有现代企业制度,就不可能有社会主义市场经济体制。我国第一部公司法已于1994年7月1日起施行,它是建立我国现代企业制度的重要法律基石。目前企业公司化已成为社会经济生活的重要内容,国有企业的股份制试点及股份制企业已经显示出其强大的生命力。毫无疑问,股份有限公司在我国也将成为最有活力的现代企业的组织形式。但是我国的公司法毕竟刚刚起步,而日本商法已有近百年的历史,因此学习日本商法也能帮助我们加深对我国公司法的理解。为使日语国际贸易专业的学生较全面地了解现代企业制度,掌握必要的商法知识,特编写本教材。

本教材共分两篇二十章,第一篇是商法总则、商行为,第二篇是公司法。主要内容有商法的起源,日本商法的历史,商法的意义、法源、特色及其在法律中的地位;商人和商行为;商

业字号、商业账簿等有关商人的制度；商业使用人、代理商、居间、行纪、运输、仓储等商人活动的辅助者；股份有限公司、有限责任公司、无限公司以及两合公司这四种日本法定公司的现状、性质、组织结构、特色；公司的财务、资金筹措、组织变更以及这些公司从成立到解散时的一系列法律程序。其中的重点是股份有限公司，如商法赋予股东大会、董事、董事会、监事、监事会的权限；大公司及小公司适用商法的范围；股东的权利和义务、股份的种类和性质、股票、公司债券的概念等。

鉴于日语国际贸易专业的学生在学习本课程以前，没有系统学过法学概论课程，为了便于学习日本商法，本教材特设“序论”，其内容主要介绍日本的国家机构、日本的法院，司法审判制度、日本六大主要法律以及法的基础知识。如西方国家的两个主要法律体系即英美法系和大陆法系的特点，公法与私法、实体法与程序法的概念等。

本教材在编写时，参考了大量最新的资料，编入了1990年以来的数次商法修改的最新内容及有关数据。另外，针对日语国际贸易专业的学生是非法律专业的特点，尽量使教材通俗易懂，每章较难之处都有注释，并附有具体案例，单词表及归纳该章主要内容的思考题，这样也能供有一定日语基础的同志作参考。另外，我们的学生是跨世纪的人材，应该学习一定的经济法律知识，所以本教材也可作为日语语言文学专业的选修课教材。

由于编者经验不足，水平有限，书中难免有错误和不当之处，敬希专家及师生给予批评指正。

编 者

1996年9月

略 語 例

法令名略語(五十音順)

商法は条数のみの表示を原則として、他は、以下の法令名略語を用いた。

会 更	会社更正法
銀 行	銀行法
刑	刑法
憲	憲法
公 選	公職選挙法
小	小切手法
裁	裁判所法
商改施	商法中改正法律施行法
商 登	商業登記法
商 特	株式会社の監督等に関する商法の特例に関する法律
証 取	証券取引法
所 税	所得税法
信託業	信託業法
生 協	消費生活協同組合法
船 舶	船舶法
倉 庫	倉庫業法

相 税	相続税法
担 信	担保付社債信託法
地 税	地方税法
手	手形法
鉄 営	鉄道営業法
独 禁	私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律
特 許	特許法
農 協	農業協同組合法
破	破産法
非 訴	非訴訟事件手続法
法 税	法人税法
保 振	株券等の保管及び振替に関する法律
保 險	保険業法
民	民法
民 訴	民事訴訟法
無 尽	無尽業法
和 議	和議法

判例引用略語

大 判	大審院判決
最 判	最高裁判所判決
大阪地判	大阪地方裁判所
東京地判	東京地方裁判所
民 集	最高裁判所(または大審院)民事判例集
労民集	労働関係民事裁判例集

判 時 判例時報

例・最(大)判昭和40・9・22・民集19巻6号1600頁,
とあるのは,最高裁判所(大法廷)昭和40年9月22日判決,
最高裁判所民事判例集19巻6号1600頁所収,の意。

目 次

序論	1
一、日本の統治システム	1
二、日本の裁判制度	2
三、法の種別	8

第一編 総則・商行為

第一章 商法の歴史	3
一、商法の起源	3
二、日本の商法史	6
三、商法の改正	8
第二章 商法の内容	24
一、商法の意義	24
二、商法の法源	27
三、商法における適用順位	33
第三章 商法の特徴及びその地位	38
一、商法の特徴	38
二、商法の地位	41

第四章 商人と商行為	49
一、商人	49
二、商人資格の取得と喪失	54
三、商行為	59
第五章 商人に関する諸制度	71
一、商号	71
二、商業帳簿	77
三、商業登記制度	79
四、営業と営業譲渡	84
第六章 企業取引の補助者	92
一、商業使用人	92
二、代理商	94
三、仲立人	98
四、問屋	101
第七章 企業取引の各類型	107
一、運送取扱営業	107
二、運送営業	111
三、倉庫営業	116
四、場屋営業	119

第二編 会社法

第一章 総論	127
---------------	-----

一、会社法の意義	127
二、会社制度の沿革	128
三、会社制度の特徴	129
四、会社法の法源	132
五、会社の種類	133
六、会社の概念	138
七、会社の権利能力の制限	143
八、会社の実態	147
第二章 株式会社の特色	162
一、株式会社の概念	162
二、株式制度	162
三、株主の有限責任	163
四、資本制度	164
五、所有と経営の分離	167
第三章 株式会社の設立	170
一、株式会社の実体の形成	170
二、社員の確定と機関の設置	178
三、設立登記	183
四、会社設立の無効と会社の不成立	185
第四章 株式	193
一、株式の意義	193
二、株主権	193
三、株主権利行使に関する利益供与の禁止	194

四、株主平等の原則	196
五、額面株式と無額面株式	196
六、無記名株式の廃止	198
七、株式の種類	199
八、単位株制度	201
九、端株制度	203
十、株式の分割・併合・消却	204
十一、株式の譲渡	206
十二、株式の名義書換	212
十三、株式の公開	213
十四、株券保管振替制度	215
第五章 株式会社の運営	219
一、機関の分化	219
二、所有と経営の分離	220
三、機関の推移	221
四、株主総会	223
五、取締役・取締役会	234
六、監査役・監査役会	250
七、検査役	261
第六章 株式会社の資金調達	264
一、資金調達の諸方法	264
二、株式の発行による資金調達	265
三、社債の発行による資金調達	275

第七章 株式会社の計算	286
一、株式会社における計算の重要性	286
二、決算の手續	287
三、資産の評価	291
四、資本と準備金	298
五、利益配当	302
第八章 会社の整理・更生・資本減少	306
一、総説	306
二、会社の整理	307
三、会社の更生	309
四、資本減少	312
第九章 会社の合併・分割・組織変更	317
一、会社の合併	317
二、会社の分割	325
三、組織変更	326
第十章 株式会社の解散及び清算	330
一、会社の解散	330
二、会社の清算	333
第十一章 有限会社	339
一、総説	339
二、株式会社との類似点	340
三、株式会社との相違点	342
第十二章 合名会社と合資会社	351

一、合名会社	351
二、合資会社	357
第十三章 外国会社の規制及び会社罰則	363
一、外国会社の規制	363
二、会社罰則	365
主要参考文献	371

第 一 編

総則・商行為

第一章 商法の歴史

民法とは独立した一つの首尾一貫した理念のもとに構成された別個の統一的な法システムとしての商法という概念は、ヨーロッパの法律学に大きな影響を与えたローマ法にはないものであって、19世紀からはじまる大陸法系諸国の商法典の制定とともに生まれたものである。

一、商法の起源

日本の商法は、明治以後、西欧の商事法を全面的に継受したものであって、明治維新前の日本古来の商事制度との間の歴史的連続性を欠いている。したがって、商法の歴史を遡るということは、すなわち、西欧の商法の歴史的発展を跡づけることになる。そこで、まず西欧の中世の商法の形成から展開しよう。

（一）中世紀の商法

古代には、個々の商法的制度は若干あったが、商法という概念はなかった。中世紀にあって、商業の復興とその発展に従って、商法は初めて独立の法域として現れた。

9世紀の頃から、地中海沿岸、とくにイタリアの一部の都会は商業が発達した。これらの都会の商人は、封建的勢力と